

SPECIAL
ISSUE

世界が期待する日本の通信産業

GLOBAL ANALYST が語る

NTT への期待と 将来展望

2026 年の世界潮流は「AI 投資 × 電力制約 × 5G/ 光・DC 再評価」。

本号は、投資家・インテリジェンス・競合の動きを横断し、NTT の現在地と勝ち筋を立体的に読む。

AI INFRA

DATA CENTER

IOWN

INVESTOR VIEW

競合比較

漫画特集

GLOBAL ANALYST

AI・NETWORK・POWER

巻頭仮説

NTT の本命は「通信料金」ではなく、AI 時代の基盤
— 回線・光・データセンター・運用信頼性 —
を束ねる力にある。

年度替わりの論点：通信は再び「主役」に戻るか

AI ブームの陰で、最も不足しているのは GPU ではなく「つなぐ力」と「支える力」

編集部リード

2026 年度の通信産業は、単なる料金競争の年ではない。世界では AI インフラ投資が膨張する一方、電力・冷却・回線・設置余地が制約になり始めた。つまり、通信会社の価値は「回線の単価」から、「AI を社会実装できる土台をどこまで持つか」へ移りつつある。

この文脈で再び注目されるのが日本勢、とりわけ NTT である。理由は、①国内の信頼性、②光・研究開発、③海外データセンター、④企業向け実装力の 4 点が、2026 年の潮流と噛み合うからだ。

本号の仮説は明快だ。NTT の本命は“通信料金の上積み”ではなく、「AI 時代の基盤企業」として再評価されるシナリオにある。

本号の結論

世界が見ているのは、
「日本の通信会社」ではなく、
AI 時代のインフラ供給者としての
NTT。

3つの焦点

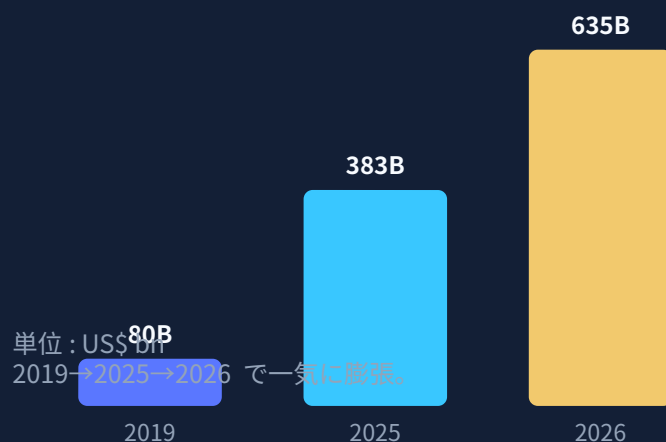
- AI 投資の拡大に対し、電力・冷却・回線がボトルネック化
- 5G SA、エッジ、データセンター、光ネットワークの価値が上昇
- NTT は「研究 × 実装 × 海外基盤」を束ねる稀有な立ち位置

KEYWORD：基盤企業

2026 年の世界潮流

AI 投資の爆発と、インフラ制約の本格化

AI インフラ投資（世界）



読み解き
AI 需要そのものより先に、
電力・冷却・立地・光回線が不足し始めている。
通信 / DC 事業者は再び“供給サイドの主役”へ。

AI 投資

68% の CEO が AI 投資拡大を計画。一方で、高度に最適化済みと答えたのは 18% だけ。

5G SA 収益化

5G SA のネットワークスライシング商用提供は 65 件。差別化接続が収益源に。

Secure / Sovereign AI

大企業は、性能だけでなくガバナンス・データ主権・配置最適化を重視。

電力制約

83% が AI 拡大の環境負荷を認識。エネルギー価格が投資ペースを左右する時代。

固定代替・FWA

2031 年には約 14 億人が FWA ブロードバンドの対象になる見通し。

光・フォトニクス

91% の経営層がフォトニクスを認知。省電力型の次世代基盤に関心。

世界が日本の通信産業を見直す理由

品質・省電力・現場実装・災害対応。AI時代に再評価される日本的強み

4つの再評価ポイント

① 信頼性

災害対策、保守運用、現場復旧、法人品質。AI時代でも最後は“止まらないこと”が価値になる。

② 光・低遅延

固定網・光技術・フォトリソは、AIの省電力・高容量化に直結する。

③ 企業実装

自治体・金融・製造・コールセンターなど、日本企業の現場に通信を落とし込む力。

④ エッジ統合

モバイル、データセンター、クラウド、セキュリティを束ねた一体運用がしやすい。

世界の評価軸

AI時代の通信会社に求められるのは、
「速い」よりも、
“安全・省電力・大規模・実装可能”であること。

安全

省電力

大規模

実装

編集部コメント

日本勢の弱みは、華やかな物語を作るのが得意でないこと。しかし2026年は逆に、その“地味な強み”が効く。AI投資が熱狂から実装へ移るほど、通信の品質と現場運用力が効いてくる。

NTT 特集①：数字で読む現在地

グループは増収増益、ただし国内モバイルは競争圧力。成長エンジンは DC ・企業 ・ AI

NTT 連結売上高 (FY2025/3Q)

10.421 兆円

前年同期比 +3.7%

EBITDA

2.657 兆円

前年同期比 +4.1%

営業利益

1.457 兆円

前年同期比 +4.1%

国内モバイル（NTT ドコモ）

売上 4.660 兆円

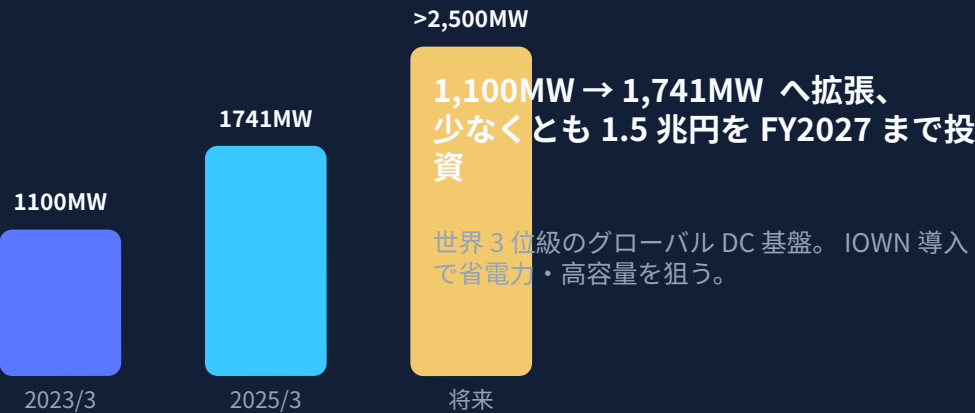
営業利益 7,454 億円 / -10.6%

新契約圧力

販売促進費増

MNP 競争長期化

NTT データセンター容量の拡張



NTT DATA / GDC の前進

- ・2026 年 3 月発表で、新たに約 115MW の DC 契約を獲得
- ・直近 1 年で 10 施設を立ち上げ、370MW 超の新 IT 容量を追加
- ・2027 年までに 100 億ドル超を投じ、AI 対応インフラを拡張

注目点

強いのは「国内電話会社」より、
グローバルなデータセンター・企業向け基盤・AI 実装力。
弱いのは、国内モバイル競争が利益率を削りやすい点。

NTT 特集②：なぜ「期待」が集まるのか

IOWN ・ AI factory ・ Private AI ・ DC 拡張が一本の線でつながり始めた

IOWN が意味するもの
ネットワーク / データセンター / 基板
内伝送まで光化を進め、
「性能を上げて電力を増やしにくい」
世界を目指す。



「AI を動かすほど、通信は電力問題
になる」
という 2026 年の悩みに対する、NTT
の独自回答。

AI 実装力

- NVIDIA 連携の enterprise AI factories を開始
- クラウド / DC / edge をまたぐ full-stack 型
- 業種別に再利用可能な production-ready モデル
- Fortune Global 100 の 75% を顧客に持つ NTT DATA が運び手

POINT
研究 → 製品 → 案件 → 運用の
流れを
ようやく一本化し始めた。

投資家が見る論点

- デモでなく受注・稼働まで行くか
- 国内モバイルの利益低下を吸収できるか
- DC 拡張とエネルギー効率を両立できるか

2026 年の勝ち筋
NTT の勝ち筋は、
「研究開発の凄さ」そのものではない。

光・DC・AI 基盤を束ねて、
企業の現場まで“安全に回る仕組み”
として売ることだ。

競合リーダー：日本の通信 4 陣営

各社とも「料金」から「通信+周辺収益+ AI」へ移行中。ただし現在地は大きく違う

主要プレイヤー比較

企業	最新状況	成長エンジン	警戒点	一言評価
NTT	3Q 売上 10.421 兆円 / 営業利益 1.457 兆円	DC 拡張、IOWN、企業 AI、海外実装	ドコモ利益率低下、電力・CAPEX	Defensive × Growth
KDDI	3Q 売上 4.472 兆円 / 営業利益 8,567 億円	5G 通信、データドリブン、生成 AI 社会実装	不適切取引調査の影響を織り込む必要	安定だが説明責任重い
SoftBank	Q1-Q3 売上 5.195 兆円 / 営業利益 8,841 億円	Beyond Carrier、PayPay、金融	モバイル獲得は選別化、成長構造転換	収益多角化が進む
Rakuten	FY2025 売上 2.4966 兆円 / IFRS 営業黒字	モバイル立て直し、AI RAN、エコシステム	投資負担、品質改善と拡張の継続	攻めの反転局面

※ NTT / KDDI / SoftBank は主に 9 カ月累計、楽天は FY2025 通期。各社で期間と定義が異なるため単純比較には留意。

投資家・インテリジェンス視点

世界が NTT に求める 5 つの回答

グローバル投資家の問い

- 1 **R&D を契約に変えられるか**
技術説明だけでなく、受注・稼働・継続収益まで可視化できるか。
- 2 **国内モバイルの圧力を吸収できるか**
ドコモ競争圧力を、企業・DC・AI の伸びで埋められるか。
- 3 **DC の成長は電力制約を超えられるか**
容量拡大と省電力・冷却・立地・規制対応を同時にこなせるか。
- 4 **IOWN は“未来技術”で終わらないか**
PoC ではなく、顧客価値・単価・コスト削減として語れるか。
- 5 **資本配分は攻めすぎず遅すぎないか**
大型投資をしながら、収益性と説明責任を維持できるか。

補助線：AI リーダーの条件

NTT DATA の調査では、AI リーダー企業は

- ・売上成長 10% 超 になりやすさ 2.5 倍
- ・利益率 15% 以上 になりやすさ 3.6 倍

つまり、NTT 自身も「AI を売る側」になるなら、戦略整合・全社運用・ガバナンスが問われる。

編集部メモ

株式市場は、研究者の夢よりも、“契約と電力” を見ている。

NTT への期待は高い。だが期待の正体は、浪漫ではなく「実装の手堅さ」だ。

巻頭特集 世界が期待する日本の通信産

業

「回線」から「AI時代の社会基盤」へ

Why Japan?

世界のAI投資は膨らんだ。しかし、現実に不足しているのは計算能力そのものだけではない。電力、冷却、光回線、立地、そして止まらない運用だ。

この局面で、日本の通信産業は意外な強みを持つ。災害対応、現場保守、企業品質、そして光技術である。華やかではないが、熱狂の次のフェーズでは、こうした“地味な強さ”が効いてくる。

通信は再び主役になり得る。ただし、主役になるのは『安い料金』ではない。安定してAIを社会実装できるインフラ供給者として、である。

Why NTT?

NTTが面白いのは、国内通信会社でありながら、海外データセンター、企業向けシステム、研究開発を同時に持つ点だ。

2026年は、この点が追い風になりやすい。AIの実装が広がるほど、ネットワークとデータセンターは一体で考えざるを得ない。NTTはそこにIOWNやPrivate AI、AI factoryを差し込める。

一方で、国内モバイル競争は利益率を削る。つまりNTTの評価は、研究の壮大さよりも『国内圧力を吸収してなお、基盤ビジネスを伸ばせるか』にかかる。

What to Watch

今後の焦点は4つ。

1. FY2025 本決算で、成長投資と資本規律をどう両立するか。
2. IOWN が案件化・単価化に近づくか。
3. DC 拡張が電力・冷却・規制の壁を越えられるか。
4. ドコモの収益圧力を、企業・DC・AIで補えるか。

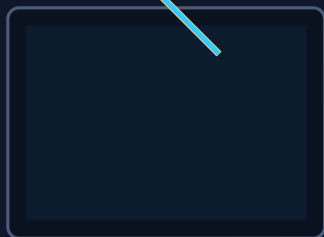
結論として、NTTへの期待は本物だ。ただしそれは『夢が大きいから』ではない。世界が“AIを社会で回すための土台”を必要としているからである。

「AIを語る企業は多い。だが、AIを支える回線・電力・施設まで一気通貫で持つ企業は限られる。」

長編漫画 世界がNTTを見始めた朝〈前編〉

1. ロンドン市場の朝

Camera: slow zoom-in



LONDON



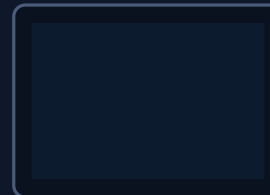
AI is everywhere...
But who carries the load?

2. 東京、研究棟の朝

Cut: blue flare



TOKYO / LAB



電力を食わずに、
遅れずに、つなぐ。
次はそこだ。

3. 競合の会議室

Whip-pan left



KDDI / SOFTBANK / RAKUTEN

うちも次の土俵へ。

料金の次は、
基盤の勝負だ。

4. ナレーション
市場は、もう
“通信株”と
してだけ
見ていない。

Stock-ticker wipe

基盤株だ。

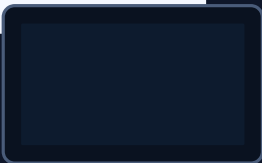
長編漫画 世界が NTT を見始めた朝 〈後編〉

5. 投資家の質問

Push in



Can NTT turn research into contracts?
And can it do it before domestic competition bites harder?



6. NTT の答え

Map lights on

DC + IOWN + Private AI

答えは、単品ではなく束ねること。
回線・DC・AI 基盤を“安全に回る仕組み”として
売る。

7. 赤い警告

Alarm flash

WARNING
国内 MNP 競争
エネルギー価格
大型投資の回収
タイミング

8. そして新年度へ

Sunrise fade

2026 年、日本の通信産業は再定義される。
その中心で問われるのが、NTT である。

結論と次の観測点

「遅い巨大企業」か、「AI時代の基盤企業」か。答えは2026年度に出始める

最終結論

NTTへの期待は高い。
しかし、その期待は“夢が大きいから”ではない。

世界が今必要としているのが、
AIを社会で安全に、安定して、電力を抑えながら動かす基盤だからだ。

その意味でNTTは、
通信会社というより「AI時代の土木企業」に近づいている。

研究、光、データセンター、企業実装。
これらを束ねて収益へ変えられるなら、2026年は再評価の年になる。

4-6月のウォッチポイント

- FY2025 本決算** 成長投資と資本規律をどう語るか
- AI 案件化** AI factory / private AI の大型案件が出るか
- DC 稼働** 容量増設だけでなく、受注・稼働率が伴うか
- 国内競争** ドコモの収益圧力がどこまで続くか
- 競合反応** KDDI / SoftBank / Rakuten がAI基盤でどう動くか

次号予告: EXPO / IOWN / 6G の「社会実装」を追う